
コードギアス 相反のライ～双璧の軌跡～

star

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「コードギアス 相反のライ～双璧の軌跡～

【NZコード】

N9721V

【作者名】

star

【あらすじ】

一つの悲劇が回避され、新たな悲劇が訪れる。負の連鎖は止まらなかつた。

深い闇に墮ちたライ。カレンは一途にパートナーの、愛する者の目覚めを待つ。たとえ他の者達がライを忘れようとも……そんな中、ある人物が彼女の元を訪れる。この時、彼らの物語は完全に変貌した……

騎士団ルート、スザクにギアスをかけたBADENDのお話。ライ

カレ
で
す。

第一話 悲劇の連鎖（前書き）

B A D E N D から始まる物語。
ここから悲劇は始まつた……

第一話 悲劇の連鎖

カレンと学園祭を見て回った。戦い続きの連続で、久しぶりにカレンとゆっくりできた。本当に楽しかった。またこうしてカレンと一緒にいたいと、そう思っていたのに……

なのに、現実がそれを許してはくれなかつた。事態は止まる」となく、僕達に試練を突きつけてくる。

お忍びで來ていたのか、ゴーフンニアが学園祭の場で『行政特区日本』の設立を宣言した。

彼女の発言が、その場どころか日本全体……いや、ブリタニアをも、世界さえをも巻き込む騒ぎを呼ぶ。

聞こえこそいいかもしれない。

だが、もし騎士団が参加すれば日本独立という大義名分が奪われ、参加しなければ平和の敵として民衆の信用を失う。

つまり行政特区日本は騎士団にとつて、一挙に追い詰める策でしかなかつたのだ。

学園祭は混乱と騒乱の内に終了した。僕は生徒会の雑事も一段落させ、一息つひとつとクラブハウスの裏手に出た。

先客がいた。

「……

スザクは無言で夕陽を眺めている。

「……スザク」

「やあ、ライ……」

いつもの学園でのスザク。穏やかな笑顔。戦闘時の霸氣はまったく感じられない人懐っこい顔だ。

「なぜ……僕とカレンのことを……」

僕とカレンが騎士団に所属しているところとは神根島の一件で

既にスザクに知られている。

だからこそ警戒していたのだが、スザクと学園で会つても、あの日からまったく変化はない。

「軍規違反なのはわかっている。だけど、こいつでは戦いでなく、

君たちを説得したい」

「……」

「君やカレンにしたら甘い考え方かな？ だけど、あきらめたくないんだ」

「……それが、君の道か」

「うん……そうだ。君たちも、コーフュニア様の特区に参加してくれ！」

「僕たちが、特区日本に？」

「そうだ。君たち黒の騎士団が参加すれば、ほかの日本人たちもきっと特区に賛同してくれるはずだ。戦いを終わらせることができるんだ。平和が作れる。みんなの平和が！」

それは、夢物語だ。現実は甘くない。コーフュニアは理想を語つただけで、スザクは信じているだけだ。

……」でギアスを使えば、特区は……騎士団は……

スザク。君は間違っているんだ。間違った世界を破壊するのなら、
その内側に取り込まれてはいけない。

「スザク！」

「……？」

「ライが命じる！ 黒の騎士団に加わり、ゼロの進む道を切り開け
！」

僕は全ての力を声にこめて、スザクに命令した……絶対遵守の、
王の力で……

「う……あ……僕が……？！　ゼロ……お、俺が……騎士団……」

スザクが苦しみはじめた。なんなんだこれは……？　王の力に抵抗しているのか！？

これまでギアスを使つた相手で、こんな反応は見たことがなかつた。

「あ……と、父さん……嫌……だ……ぐうッ……」

……これが、スザクの意志の強さとこいつの強さが。
ギアスの命令にも抗う、この強さが。

「ぐ……あ……あああ———ッ！」

……しばらく苦しみ悶えていたスザクだったが、やがて静かに立ち上がつた。彼の瞳は赤く縁取られていた。

ギアスにかかった者がしている、独特な目を……

「分かつた。黒の騎士団に加わろう。僕が、ゼロの進む道を切り開く！」

……これでいい。これで、黒の騎士団は最大の障害を排除し、最強の戦力を手に入れたのだ。
ゼロも喜んでくれるだろう。

スザクの黒の騎士団加入によつて、事態は一気に動き出した。

ユーフェミアの唱えた特区日本構想は、彼女の騎士であり、恭順派の希望の星でもあつたスザクの離脱で崩壊した。

スザクが見捨てたと言つことは、結局、それが口先だけの懐柔策だつたのだろうと日本人は判断したのである。

黒の騎士団はこの機を逃さず武力蜂起。ゼロとスザクを先頭にトウキョウ租界を一気に制圧したのである。

トウキョウ租界の陥落は始まりに過ぎなかつた。黒の騎士団に呼応し、全国で名誉ブリタニア人も含めた日本人が蜂起。

またたく間に広がつた解放戦争の炎はついにブリタニア軍の撤退という結果を勝ち取り、ゼロは高らかに宣言した『今日衆国日本』の建国を。

「よく来てくれたな、ライ」

「なんだ？ ふたりだけで話とは？」

日本が解放され、今日は団員達によつてアジトで祝勝会が開かれているのだが、僕はゼロに呼び出され、人気のないゲットーの倉庫街に来ていた。

「なに、礼を言いたくてな。スザクを仲間にしてくれた礼を」

「ゼロとスザクの力が合わされば、もはや敵はないさ。事実、日本は独立を取り戻した。

「これからブリタニアが攻め込んできたとしても、ゼロやスザク、藤堂さん……そして僕とカレンの騎士団の双璧がいれば、日本は安泰だ」

「ああ、できればそうしたかったよ……お前と共に、これからも戦つていきたかった……」

「？ ゼロ？」

「スザクを仲間にした……その結果をもたらしたことは感謝している……ただ一点を除けば」

「ただ、一点？」

「あのスザクが、一夜のうちに我々の考えに賛同して合流してきた理由だ」

「それは……僕とスザクが話し合って

「話し合った結果、ギアスを使った」

「！？」

「そうだな？」

「……すべては、君のためだ。君と共に歩む道を切り開くため。あの状況を打破するためにも必要だつた……君だつてスザクを仲間に迎えたがつていただろうー！」

「俺は、スザク自身の意志で賛同して貰いたかったんだ！ そうでないならば、敵同士になつたほうがましだつた！」

「ー。」

「お前は、俺の意地とプライドと……そして友情に泥を塗つた！ この行為は許し難い！」

「何を言つてゐる……僕こそ、君の……」

ゼロの仮面が一部開き、瞳が見えた。

「ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアが汝に命じる！ 永遠の闇に眠れ！ ライ！」

なぜだ？

じつしてだせ口。ただ僕は君のために……みんなの、日本のため
[二]

「……ル、ルルーシュ……」

「おやすみ、ライ」

昔、契約者が言ったことと同じ言葉。なのに、ルルーシュの声
には何も感情がこもっていないかった。

僕はまた眠りについた。ただしあの二つと違つて、底の見えない
[二]
永遠の闇の中に……

第一話 届かない声（前書き）

行政特区をユーフュニアが宣言した日に、ライがスザクに『騎士団に加われ!』とギアスをかけてします。

スザクが騎士団に加わったことで日本解放には成功するものの、ゼロの反感を買ってしまったライ……

正直言つて、「これはないだろ」って思いましたね。

といつかルルーシュに言いたいことがあります……

「DSでスザクに『仲間になれ!』ってギアスをかけるお前が言つ
な!」

第一話 届かない声

黒の騎士団は最大の障害を排除し、最強の戦力を手に入れた。

ゼロと私達騎士団の双璧、スザクと言った面々の前に、コーネリアでさえも戦況を立て直すことができず、ついに日本を取り戻した！

今日は祝勝会ということで、アジトは今までにない盛り上がりを見せている。今までの戦いがようやく実をむすんだんだから、その喜びは計り知れない。

……なのに、どうしてあなたがいないの？ ライ……

これまでの戦いの中でも数々の戦功をたててきた、ライの姿だけがどれだけ探しても見つからない。

「扇さん、ライを見てませんか？」

「いや、まだ見ていないが……来ていないのか？」

「先ほどから電話もかけてるんですけど……全然でないんです」

ゼロの姿も見えないが、ゼロは元々神出鬼没だったしそんなに心配していない。『ひいう賑やかな場に積極的に参加するとも思えないし……』

だけじ、ライは？

ライも田本開放のために共に戦つてきて、その喜びも大きいはず。みんなで一緒に集まって喜びを分かち合つ人なのに……全然姿を現さない。

「（ライ……あなた、一体どう……）【ルルルルル】…… もじもじ……」

『カレンか……今から私が語り病院にすぐ来てくれ』

「ゼロ！ 病院つて……なんですか？」

『……ライのことだ。詳しく述べ今は言えない。すぐに来てくれ！』

「……わかりました！」

ライが、病院に？ それに、今は言えないって……まさか、ライの身に何かが！？

私は扇さんに一言言つと、アジトを後にした。なんだかよくわからぬけど……嫌な予感しかしない……！

「ライ！」

……病室の中では点滴を受けて、静かに眠っているライの姿があつた。

ゼロが目の前の病室を指差す。

『……だ』

「ライは……ライはどうして……？」

『……カレンか』

「ゼロ！」

病院に着いた私はすぐさま一人を探す。
すると、病室の前で座り込んだゼロの姿が見えた。

私はいても立つてもいられず、病室の中に入つていく。

……しかし、何度呼びかけても声は返つてこない。何度手を握つても握り返してこない。

「……ライ？」

「彼は今……意識を完全に失っています。つまり、植物人間の状況に陥っています。回復は……難しいかと」

「……！」

私は思わず専門医の胸倉を掴んでいた。

「どうこう」と…？

「わ、わからないんです！ 体に外傷がなければ異常はありませんし、臓器にも問題はない。原因がまったくつかめないんです！ まるで……彼自身が目覚めるのを拒絶しているような……」

「ふ、ふざけないで…！ そんなことがあるわけ…！…！」

『やめろカレン…』

「……ゼロ……それじゃあ……ライは……」

『……』

「……」

ゼロは何も言わずに、首を横に振った。
つまりそれは、ゼロもライの回復は望めないと判断したと断つ
て……嘘だ……

「ねえライ！ 起きて！！ 私よ、紅月カレン！！
嘘でしょ、もう起きないなんて……私を驚かそうとしてるんでし
ょ！？ ねえ！」

私はライの腕を持ちながら、ライの肩をゆすりながら、ライにひ
たすら呼びかける。

信じられない！ 信じたくない！！ やつと、やつと日本を取り
戻して、みんなで一緒にいられると思ったのに……なの……！

何度も声をかけた。何度もライの手を握りしめた。

それでも、彼は何の反応も示さなかった。目を開けなかつた。何
もしゃべらなかつた。

あの青い綺麗な目が見えない。
いつも私を気遣ってくれた優しい声が聞こえない。
私を勇気付けるために私の手を握ってくれたあの感触が感じられない。

彼の時は……完全に止まっていた。

「お願いだから……もう自分勝手なことなんてしないから！……困らせたりしないから！……ずっと傍にいるから！……だから……だから目を開けてよライ……！」

どれだけ叫んでも、病室には私の声だけが響いている。
ライは指一本動かさない。

「お願い、だから……傍にいて……私を、一人にしないで……」

『カレン……無駄だ。いくら呼びかけても、ライは……もう……』

「……嘘よ……そんなの、そんなのって……ッ！……ライイイイイイイイイイイ！」

私はただ叫ぶことしかできなかつた。叫んでもライは反応しないとわかつてゐるのに。

それでも、信じたくはなかつた。認めたくはなかつた。

私達は日本を取り戻した。その代わり、それ以上に大切な人を失つてしまつた……

誰よりも日本のことを、私たちのことを思つてくれていたライを

……

第一話 届かない声（後書き）

カ「ライ……ライ……！」

ル「……」

シ「……」

作「……（重い）！今までの後書きの中で一番空気が重い……）
えー、どうだつたでしょつか？一応ギアスをかけた後、ルルーシュがライを病院に運んだという設定です。いや、本当に捨て置いたつていうなら本当にルルーシュが人でなしのよつに感じますし……」

ル「あいつがしたことは許せない……だが、あいつが今まで俺達のために戦ってきたのも事実……」

作「各々が様々な思いをめぐらす中、事態は加速していく。はたして彼らの運命は……！？」

第二話 紅蓮の騎士、迷走

一週間。日本がブリタニアから解放されて一週間がたとていた。

未だに日本に残るブリタニア軍の残党・地方部隊を掃討し、もはや日本は完全にブリタニアから独立したと言つてもいい。

ブリタニアは数多くの植民地を持つているが、その植民地が独立してしまうなど前代未聞の事態であり、日本に呼応してほかのエリアでも反ブリタニア活動が広まっているという。

そのため、ブリタニアはEJや日本だけでなくこうしたエリアの対処にまで部隊を動かさなければならなくなり、日本には一時の平穀が訪れていた。

騎士団の皆は遂にブリタニアの勢力を一掃し、皆生き生きとしている……ただ一人、私を除いて。

この一週間で、騎士団の皆がライのお見舞いに来る数が減つてしまつた。

皆、新しい日本の国作りやブリタニアの防衛に向けて忙しい毎日が続いている。

私は怖くなつてきた。そのうち、皆がライのことを忘れてしまうのではないかつて。

今では、騎士団の双璧と言えば私とスザクと言われるよひにまでなつてきた。

ライと一緒に戦い抜いて、背中を預けるほどになつて手に入れた『双璧』の名が、今ではスザクのものになつてている。皆、今はいいなライよりも、今いるスザクの方が大切なのだろうか……

……たとえ、皆がライのことを忘れても、せめて私だけは覚えていたい。最後まで、ライの目覚めを傍で待つていてたい。

「……ライ」

いつからだつただろう。日本より、ライの方が大切になつていて。日本の解放より、ライの傍にいたかった。

あの日から何度も後悔している。

ちゃんと想いを伝えておけばよかつた。ただ一言、『好き』と言えておけばよかつた。

「ねえ、どうしてこんなことになっちゃったのかな？」

何が間違いだったのだろう。どこで間違ったのだろう。

一緒に学園祭も楽しんで、日本も開放して、誰と一緒にいられるはずだった。

なのに、誰よりも一緒にいたかった貴方がいない……

これから私はどうすればいいんだろう？

今までは、戦い抜けば明るい未来が待っていると信じていたのに、その望みはあっけなく崩れ去った。

神様といつものほ本当に残酷だ。

絶望から救い出されたと思ったら、今度は更に深い絶望を私達に突きつける。

もう、ナイトメアにも乗れないよ。何のために戦えばいいのかが
わからない。

もう、ライの傍から離れたくない。これ以上貴方と離れたくない。

「ハイ…… 好き。 愛してる…… お願い、 田を覚ましてね」

貴方の声を聞きたい、貴方の綺麗な顔が見たい、貴方が手を握つてくる感触をかみしめたい。

ライ。お願いだからもう一度呼んで、私の名前を……

「本当に、弱いわね。私は」

冷静さを取り戻すために、一度飲み物を買いに病室から出た。

もしライがいたら、優しい彼のことだ。そつと励ましてくれただ
けい。

いなくなつてからやつとわかつた。彼の優しさが、温かみが。

私の強さは、全部ライがいたからこそだつたんだ。ライがいたか
らここまで戦つてこれたんだ。

どうしてもひと呼吸に気付かなかつたんだろう。

「ライ……」

病室に戻つても、ライは眠つたままだつた。
最初はひょつとしたらと期待していただけど、そんなことは起つ
なかつた。

彼はひたすら夢を見続けている。現実に戻つてきて欲しいと願つ
ても、彼は目を覚まさない。

「何が悪かったのかな？ ビリして、こんなことになつちやつたの
かな？」

私にはもうわからない。何が悪かったのか。どうすれば、彼が助かつたのか。

「教えてあげようか?」

「!子供? ビウしてこい元」

突然私の呟きに答えるように、後ろから声がかかった。
身長から……小学生くらいだろうか? 髪がとても長く、床に届く勢いの金髪をしている。

「はじめまして、紅月カレン。僕の名前は▽・▽・

「▽・▽・?」

何なのこの子?? C・C・みたいな名前、そして見た目とはかけ離れて大人びた様子。

それに、どうして私の名前を！？

「細かいことは気にしなくていいよ。僕は君に真実を教えにきたんだ」

「真実……？」

「そう。例えば……どうしてライが目を覚まさないのか、とかね」

「！ どうして！？ なんで、ライのことを……ッ！」

「どうして私やライのことを知っているかなんでもうどうでもいい！この子は知っている！ 誰もわからない、ライがこうなった原因を！」

「やつぱりゼロからは聞いていないんだね。言えるわけないか。彼がこんなことをしたんだもんね」

「！？」

「ゼロが……！？ そんなことあるわけが……彼も、私も、日本人がみんな信じているあの人があ……

「ゼロは、超常の力を持っている。他人を意のままに操る力を」

「そんな、馬鹿な話が……」

「君は不思議に思わない？ なぜ体に何の異常もない彼が目を覚まさないのか。むしろ辻褄が合つはずだよ。力があつたとして、今までのゼロの行動を振り返れば……ライは、ゼロのせいで、目を覚まさないんだ」

「……」

「まだ信じられないかい？ なら教えてあげるよ。ゼロの正体、力の詳細、彼がその力で今まで一体何をしてきたのか……そしてビックすればライが目を覚ますのかを」

「……」

「聞くだけでいいんだ。それをどう判断するかは君しだい。君の考えで動けばいい」

「たとえ、ゼロのことが嘘だとしても……本当にライが目を覚ますなら、私は……」

私は何も言わずに、こくりと頷いた。

第三話 紅蓮の騎士、迷走（後書き）

作「……これなんてカレン裏切りフラグ？」

ル「」ればかりは、ライにしかとめられない……」

作「しかし、そのライがこの状態ですしね。えー、このカレンはアーニメ一期以上にルルーシュへの不信感が高まっていますね。次回でライ復活するでしょうけどキャンセラーで」

（「ルルーシュ・スザク」）ライ・カレンか……枢木が騎士団に加わり、双璧がブリタニアに付くというのか……皮肉な話だな」

作「騎士団」ルルーシュ・スザク（ライ・カレン）みたいな？ でもライは戸惑うでしょうね。騎士団と戦うこともですけど、カレンが自分のせいでブリタニアにつくってこと……」

（「カレンはむしろ……『ゼロ』よくも、よくもライを……！」）
みたいな形で襲い掛かりそうだがな」

作「ルルーシュが『俺たち一人揃えばできないことなんて……！』って言つてましたが、その一人と双璧が正面衝突する……！ どちらが勝つんでしょう？ 微妙なところなんですが……」

第四話 反逆の双璧

一つの国と一人の人。どちらか一つだけを選べといわれたら当然皆が国を選ぶだろう。

私たって今までならそんしたはずだった。どれだけ誰かを大切に思つたとしても、好きになつたとしても、日本を捨てる事はないじずっと思つていた。

だけど私は日本よりも、ライを選んだ。

国よりも、組織よりも、仲間よりも たつた一人の人を選んだ。

い。
……闇。闇。闇……何も見えない。何も聞こえない。何も感じない。

『永遠の闇に眠れ』というルルーシュのギアス。その闇はあまりにも何もなくて、あまりにも残酷だった。

おそらく今の僕はまだ生きているのだろう。生きていなければ、この闇だって消えているのだから。

眠れといっても夢を見ているわけではない。だけど、これは悪夢以上にたちが悪い。

……あれからどれくらいたつたんだろう。

数日？ 数週間？ 数ヶ月？ あるいは数年？ もつとだろうか、それさえわからない……みんなはビビりしてるんだろう。

カレンは大丈夫だろうか？ やわしい彼女は多分僕のことを心配しているだろうけど、僕はその彼女に何もしてあげることもできない。むしろ迷惑をかけているんじゃないだろうか……

せめて、僕のことを忘れててくれていればいいんだけど……せめて、僕のことを忘れて、誰かと幸せに生きてくれば、僕はそれで……

「ライ？」

……？ カレン？ カレンの声が……聞こえる？
なんでだろう。今までは何も聞こえなかつた空間から、僕が求め
る声が聞こえた。

「ライ！」

……！ れは、夢なのか？ それとも……

「ライ、起きて！」

……？ 光が見えて……！

「ライ！ ライ！ 良かつた！ 良かつた……！」

「……か、カレンーー!?」

カレンが僕の温もりを確かめるように、力強く抱きしめてきた。
見える……？ まさか、ギアスが解けたのか！？ 絶対遵守の王
の力が、何で！？

「田が覚めたのかい？」

「はじめまして、ライゼル様」

「！ 誰だ！？ ……！ ジュ、ジュレニアーー!?」

見ると部屋にいたのはカレンだけではなかった。

小さな子供と……そして、かつてナリタの戦いで戦死したはずの
ジュレニア・ゴットバルトだった。

「僕の名前はVVVV。彼女にお願いされて、君を起しこさせたんだ
よ。ジュレニアの、ギアスキャンセラーで」

「……ギアスキャンセラー？」

「……。どんなギアスであるか、ギアスキャンセラーはそのギアスを解除することができる。たとえ、王の力であるかとね」

「はい。私のキャンセラーはどのよのうな力にも対応できます」

「……それじゃあ、本当に『ギアス』つていつのは本当だったのね」

「！？ ま、待て！ なんでカレンがギアスのこと……」

「なんでカレンが……彼女には僕だけ話していない！ 力も見せていない！ なのになんで彼女が！？」

「……ライ。全て聞いたわ。ギアスのことも、ルルーシュがゼロだつたつてことも……」

「！？」

「僕が話させてもらつたよ」

「……君は何者なんだ？ なぜゼロのことを知っている？」

見た目は小学生と変わらないくらいなのに、先ほどからの口調や、知っている内容、明らかに小学生とは思えない。

「C・C・Cと似たようなものだよ。僕も不老不死つて」とセ

「君も……C・C・Cと同じ……」

「まあ、僕らは一度退室するから一人でゆっくり話しな。特にライ
はまだ情報が足りないだろうしね」

「『ゆづくり。ライゼル様』

「！……ジエレミア卿、僕のことをそのまま呼ぶのはやめていた
だきたい」

「しかし、貴方様はブリタニアの……」

「僕はもう狂王ではない。ただのライだ」

「……わかりました。ライ様申し訳ありません

「様もいいんだけど……まあいいか」

「そういう性分ですので……私めもお話ししたいことはあります
それは後ほど。それでは、また」

そういうて二人は退出していった。今部屋にいるのは僕とカレン
だけとなつた。

いくら助けてもらつたといつても、まだ彼らを信用はできない。

「…………ひとまず基本事項を聞きたいんだけど、『』はどこだ？ 僕が眠つてからどれくらいたつた？」

「『』は、ブリタニアの離宮だそうよ。なんでも、皇帝が密かに作つた場所だそうで、誰も知らないみたい。」

「それと、貴方が眠つてから一ヶ月くらいがたつた……日本はもう解放されてるし、皆も元気だつた」

「…………ブリタニアの離宮。つまり、カレンが日本を捨てたつてことか……僕のせいか。僕のために、カレンは日本を、母国を捨ててしまつたのか。今までの戦う理由だつたものを。」

「…………ライ。私は何も後悔していないよ？ むしろ、貴方が日本をさまして本当に嬉しく思つてゐる。」

「私はずっと不安だつた。怖かった。私はもう、貴方と一緒にやなきや嫌だ……お願いだから、もうどこにも行かないで。もう消えないで。私を一人にしないで……そのためなら私はなんでもするから」

「…………」

「カレン……『』めんね。ありがとうね。僕を覚えていてくれて」

「ライ……好き。私は、貴方のことを愛してゐる」

「…………ありがとう、カレン。僕も、君のことが好きだ。誰より

も、君だけが

「うんー。」

……その後、僕は打ち明けた。

僕の過去を、僕もギアス所有者だということを。そしてスザクにギアスをかけたこと。ルルーシュが僕に、ギアスをかけたことも……

「……ライは何も悪くないわ。家族を守るために戦つて、そしてこの時代でも私達と一緒に戦つた。

スザクのことだって組織のためにやったことで、現状を考えれば間違つていなかつた。そうでなければ、日本だってまだ解放されてなんていなかつた。悪いのは、現状を受け入れなかつた、わからうとしなかつたルルーシュよ」

過去を話しても、ギアスを所持していると知つても、スザクにギアスをかけたことを話しても、カレンはそれでも僕を信じてくれた。

本当にカレンは優しい。普通の人間なら、僕を嫌悪し拒絶するだろうに。

それなのに彼女は許した。それどころか、受け入れてくれた。罪深い僕を……

「私、ルルーシュが許せない。ギアスキャンセラーがなければ、ただ死を待つだけだったのに、そんな状態にライを、仲間を陥れるなんて……！」

「カレン。君が僕を思ってくれるようにな、彼も友達が大切なんだよ」

「それでも、許せない。ルルーシュは絶対に……！」

「カレン」

「！」

静かにカレンを引き寄せて、彼女の頭を撫でた。

こうしたのも、全て僕の行動のせいなんだ。彼女に憎しみを持たせてしまったのも、全て僕のせいだ……

「カレンごめんね。もう、どこにも行かないから……君の背中は僕が守るから」

「うん… うん…」

カレンの頬に右手を当て、彼女の顔を自分の顔へと引き寄せた。

「ん…」

「……う」

口付けは一瞬だった。だけど、カレンの頬は彼女の髪の毛のよう
に、真赤に染まっている。

僕も多分そうなってると思う。勢いでしてしまったけれど、これ
がはじめてのことだった。

「一緒にいる。じゃまでも、一人で」

「うふ。ライと一緒になら、私はどうでも行く。だから、もうどう
にも行かないで」

「ああ、約束する。僕達はこつまでも、ずっと一緒にだ

これから歩むのは今まで以上に修羅の道。

それでも、もうこの道を進むしかないといつになら、僕は迷わず進もう。カレンと共に……

僕を信じてくれたカレンを、もう失わないよ……

- - - 日本 - -

合衆国日本の首都トウキョウ。その政府だった場所には今、俺と扇がいる。

「どうだ？ 中華連邦は何か言つてきたか？」

「ああ。一週間後、会談の場所を設けるそうだ」

「そつか……ライとカレンについての情報は、まだ入らないか？」

一ヶ月ほど前、カレンが作戦途中で突然命令を無視し戦線離脱。紅蓮と共に姿を消した。

そして病室で寝ていたはずのライも姿を消し、さうにあいつの愛機、月下までなくなっていた。

かつて騎士団の双璧と呼ばれたあいつらが突然いなくなり、今までその行方がわからない……一体、あいつらはどこに行つたんだ？

「いや……全然だ」

「そうか。私も彼らのことは心配している。情報が入り次第、連絡を」

「ああ、わかつた……「大変だーゼロー」　一　玉城？」

「玉城か……何があつた？」

「それがよ、全世界に向けてブリタニア皇帝の演説が始まるとそうだ！」

「……ブリタニアがついに本格的に動くのか……わかつた。騎士団幹部を作戦室に集めろー！」

「あ、ああ。今から連絡する」

しかし、皇帝が今更なぜ？今まで日本が解放されてからも自分からは動かなかつたあの男が……本国でなにか動きがあつたのか？

- - - 作戦室 - - -

作戦室には幹部が皆集まつておあり、モニターには丁度皇帝が演説を始めようとしていた。謁見の間にはブリタニア皇族や上流貴族が並んでいる。

『皆のもの、忙しい中じ苦勞であつた。今日集めたのは他でも無い、新たな皇族の紹介をしようと思つてな』

「皇族？」

新たな皇族……今まで表舞台に出てこなかつた人間をこの時期に
国際発表で？

まさかその人間をEJICA日本の舞台の総司令にでも祭り上げると
でも言うつもりか？

……ばかばかしい。戦場を知らずに、平和に過ぎしてきた皇族に
その任務が務まるわけがない。

『さあ、入つて来い。みんなの前に、その姿を示せ！』

皇帝の発言とともに後方の扉が開く。
誰もが新たな皇族、それも最上位の権力をもつ人間を見ようと振
り返る。

だが、扉から入つてきたのは……

「……え？」
「嘘……」
「まさか……」

なぜ……なぜお前達が？ なぜそここいるーー？

『ライ・エル・ブリタニア。ただ今参りました』

見間違えるわけがない。ライが、カレンとジャレニアを引き連れて謁見の間に入ってきた。

『紹介しよう。新たな皇族ライ。この者の王位継承権は三位！　今は亡きクロヴィスの地位と権限を取れる！』

「なー？」
「ライが皇族！？　おまけに三位！？」
「どうこうことだよー！」

幹部の間に動搖が広がる……当たり前だ！　俺とて、信じられない。今にも叫んでしまいそうだ。

なんであいつらが……いや、その前になぜライが用意めている…？　ギアスが解けたのか…？　そんなことが…！

『そして傍にたつておるのはこやつの選任騎士、カレン・シュタッ
トフルト！

並びに親衛隊長のジョンレミア・ゴットバルト！』

「カレンまで！？」

「おまけに、紅月ではなくブリタニアの性を！？

「それに、親衛隊長ってあのオレンジじゃないか！」

意味がわからない……なぜ、なぜ、なぜ！？

ライ、カレン、ジャレミア。三人の行方不明者が突然姿を現した
と想つたらこの状態。一体、何がどうなっている！？

『この者達には、先日我が領土から独立した合衆国日本の掃討を命
ずる！…』

「「「な…？」」

『謹んでお受けします。陛下』

ライが勅命を受けた……？ ライとカレンが、ここに攻めてくる！？ 敵として、俺たちを討ちにくるだと！？

あいつらが、本当にブリタニアについたというのか!?

映像は途切れた。ここで国際発表は終了だというのだろう。

「え、エリコ、アレだよー? なんだあこひりが.....」

「落ち着け玉城！」

「なんで、カレンが……」

「ハヤシまで……一体何が何なんだ？」

「あ、おニギヤロー。」

「……ひとまず今日は解散する。まだあれが本当にライやカレンだ
といつ確信はない。各々、戦闘準備だけは怠るな！」

幹部の制止を無視して部屋から退室した。

俺だつて信じたくない！ だが、あれは間違いなくライと力

つまり、俺たちは今まで俺たちを守ってくれた双璧と戦わなければ

ばならぬんだから

ブリタニア

「お疲れ様、
ライ」

「ああ。ありがとうカレン」

放送が終了した後、パーティーが開かれた。僕が新たに皇族として発表されたことで、後見人に着こうとしたり、同じ皇族として挨拶をするものがいた。

だけどその大半は利益を求めたり、僕を見極めようとする者達ばかりでとても窮屈なものだった。

カレンはカレンで声をかけられていたので、僕が彼女をつれていち早く会場からでたわけだが。

「……でも、『めんな』。これで君まで日本と戦うことになった。扇さん達もいるのに」

「最初から覚悟はしていたわ。貴方がいれば、私は大丈夫。あなたさえいれば、それでいい」

「ありがとう、カレン」

「……殿_下、お楽しみの最中もつしわけありませんへん」

「失礼します、ライ殿_下」

「ん？ 貴方はたしか……」

部屋の中に、白衣に身を包んだ科学者のような男と、その助手のような女性が入ってきていた。

確かに、以前スザクが所属していた……

「はい、殿下たちのナイトメアの整備等を担当していますロイド・アスブルンドといいます。どうぞよろしく」

「ロイドさん、殿下に失礼でしょー。」

「え? どうして?」

……噂で聞いたとおりだな。身分を特に気にする事なく、自己を貫くマジドサイモンティスト。
しかしながら、ransportなど数多くの兵器を作り出した天才科学者か……

「いえ、構いませんよセシルさん」

「え? どうして私の名前を……」

「セシル・クルーミー。上院のロイド伯爵の補佐をしながらも、自身もフロートゴニットを考案するなど、類まれなる才能を發揮する優秀な補佐官と聞いています」

「い、いえ、それほどでは……」

「謙遜する必要はありませんよ……噂で聞いたとおり貴方は美しい方だ」

「で、殿下?」

「本当にですよ。やけの美女にも劣らぬ……王一?」

「…………王一?」

……ツー　こきなりカレンが足を思いつきつ踏みつけてきた。な
ぜ！？

「ライ、余計な話はしないまで……それでロイアル伯爵、話とは？」

「はーい、殿下たちのナイトメアのことです」

「…………え、どうなつてこる？」

「月下も紅蓮もフロートの取り付けは完了していますし、頼まれた
武装も完成しています。MVSもちゃんと取り付けていますので」

「…………」

「ただ、僕も気になつてるんですけどね。なんで殿下たちが騎士
団のナイトメアを所持していたのかを。強奪したとか聞きましたけ
ど……」

「…………ですよね。普通信じるわけないか。

まあ、一応姿かたちも変えてもらつて戦場ではわからないよう
したけれど、整備していた人間の月は「まかせない。特に月下は僕
にしか動かせない」ピーキーな機体だし……

「殿下が今まで何をしてきたかも知りたいですし、少し調べさせてもらつても……」

「死にたいのか？　ロイドよ」

「！　あ～」めんなさい、めんなさい！」

「ジョレニア卿！」

「まつたく……殿下、このジョレニア・ゴットバルト。ただ今親衛隊候補生の選抜より、帰還しました」

「ああ、じ苦労だった」

親衛隊のことはジョレニア卿に一任していた。この一ヶ月ほど彼と過ごし、彼のブリタニア、そして皇族への忠誠は本物であり、僕に対しても忠誠を誓つていると判断したからだ。

ジョレニア卿の方が軍の情報にも詳しいし、何より軍のものと親しい。

「それで、優秀な人材はいましたか？」

「特に目立つたのは……私のかつての同志の妹、マリーカ・ソレイシイでしょうか」

ジョーレニアが書類を提示した。

マリーカ・ソレイシイ

士官候補生の少女。陸戦繩機科で最優秀の成績。

……兄、キューエル・ソレイシイはナリタの戦いで戦死。

「問題はないな。実戦経験こそ少ないが、能力は申し分ない。この調子で頼む」

「はっ！」

人材も揃つてきた。機体も最終調整が済めばいつでも出撃できる。

皇帝の命令では、一ヶ月以内に日本に攻め込めといふこと。それだけあれば、親衛隊の選抜・編成もできる。

一ヶ月後、僕達は大切な仲間だった者達と戦う。だけど、せめてそれまでの間は、カレンと一緒にいたい。彼女は僕が守る。彼女の体も、心も……

一ヶ月後、後に「東京決戦」と呼ばれるブリタニアと日本の間の総力戦が行われる。

ブリタニアの総司令は初軍務であるライ・エル・ブリタニア。
日本の総司令は黒の騎士団の総司令、ゼロ。

後に、今世紀最高の戦略家と呼ばれる一人の戦いが始まつたとし

ていた
...

第四話 反逆の双璧（後書き）

作「完全に分かれました！ ジュレニアやロイード・セシル、セラードはマリー・カといつた面々がライに協力。本名は『ライゼル・エス・ブリタニア』なんですが、混乱を避けるために文字をいじつて『ライ・エル・ブリタニア』になりました」

ル「……本当に全面戦争をするつもりか？」

シ「本気で戦わせるとはな……」

作「次回は騎士団側のお話です。ルルーシュたちはどう動くのか…」

…

第五話 惑つ者達

・・・合衆国日本 黒の騎士団 ・・・

「どうだディートハルト。ブリタニアの動きは？」

騎士団の作戦司令室。騎士団も日本防衛線に向けて軍備を充実させていた。

ここには在籍する幹部の代表が揃っている。メンバーはゼロ、扇、藤堂、ディートハルト。今はゼロがディートハルトの報告を受けていた。

「今のところ、軍備の調整中のようです。少なくとも、攻め込んできたとしても五日はかかるかと」

「わかった……暁や残月、なにより斑鳩の調整は？」

「暁、並びに残月は最終調整を残すのみ。しかしながら斑鳩の方は……厳しいかと、ラクシャータの言葉です」

「……そつか」

新型ナイトメア、暁と残月の補強は最低限のこと。すでにブリタニアはライヤ・カレン、ジャレミアといった主力部隊を中心にフロートユニットを搭載した機体が出回っているといつ。

日本防衛戦においても、航空戦力で劣らないためにこちらも空で戦える戦力が必要だつた。

少しでも戦力が欲しい中、斑鳩が出撃できないのは痛すぎる。

「……ならば、今は斑鳩を後回しにするよう伝える。それよりも、暁を大量に生産したほうがこちらも助かる」

「わかりました」

「……なあ、ゼロ。本当に、本当にライとカレンはブリタニアにいたのか？」

「……事実だ。カレンのシユタットフェルト家も、ライの後継人となつた。あの一人は……もはや敵だ！」

「……ツー！」

扇は今だ信じられないのか、ゼロに一人のことを聞いたが、……聞くだけ無駄だつた。

すでにあの一人はブリタニアの軍門に下つたと、団員は認識していた。

あの一人がブリタニアに加わったことは騎士団にも大きく影響した。

騎士団員の中に、ブリタニア軍に加わる離反者が出てきたのである。若いながらかつて双璧と呼ばれ、隊長に任命されるほどの実力を持ち、団員達の信頼を得た一人。その一人を慕うものは少なくなかつた。それほど、彼らの存在は騎士団の中で大きかつたのである。

「だがゼロよ。実際のところ我らが不利だということは変わらない。離反者が現れ、騎士団の戦力は低下している。地力で劣っている我らには、これ以上の戦力の低下は許されない」

「わかつている！ ディートハルト、新幹部の選出はどうなつている！？」

「オペレーターは三人確保しました……しかしながら、ナイトメアのパイロットは今だこれといった人材は見つかりません」

日本が解放され、新たに防衛の軍として人材を集めようと試みたが、これと言つた実力者は現れなかつた。最も、ライヤカレンの抜けた穴を埋める者などいるはずがないのだが。

今の騎士団の戦力と呼べるのは藤堂、四聖剣、ルルーシュ、スザクくらいである。

「……中華連邦との外交はどうなっている？ 神楽耶様は？」

「現在、天子と掛け合っているところですが……報告によると、上層部を憎んでいる派閥があるようで、彼らとも話を伺っているそうですね」

「引き続き、連絡を頼む」

神楽耶の悲しみも大変なものだつた。やつと従兄弟のスザクが目を見ましたと思ったら、今度は同じく血のつながりがあり、頼りにしていたライとパートナーのカレンがブリタニアに。思わず、スザクの腕の中で涙していた。

だが、それでも彼女は日本の代表であるという矜持を捨てなかつた。今も日本の代表として中国と掛け合っている。愛する祖国を守るために。

きっと、ライ達も田を覚ますとひたすらに信じて……

「藤堂、お前は騎士団の訓練を頼む。扇、ディートハルト。何か動きがあればすぐに伝えてくれ。スザクには、ランスロットの調整を済ませておくよう伝えてくれ」

「了解！」

ゼロは幹部達に通達すると、血塗に戻つていつた。血塗には C . C . がピザを食べて待つていた。

「「J#苦労なことだなルルーシュ」

「……黙れピザ女」

「せう言ひつな。元はと言え、お前が引き起しJした」ことだらうへ。お前がライにギアスをかけたことで、Jの悲劇が始まった」

「違う！ ライがスザクにギアスをかけなければJはならなかつた！」

俺もナナリーも……スザクも、ライもカレンも… 今はきっと一緒にこの国でいられた！」

「本当にやうが？」

「何だと……？」

C . C . の言葉に苛立ちを隠せないルルーシュ。
しかしそんなルルーシュを無視し、C . C . は言葉を続ける。

「ライのやつたことは別に戦略的に間違っていない。現に今まで騎士団はあの白兜に何度も苦しめられた。その白兜を行政特区日本の計画をつぶす形で味方に取り込んだ。

もしライがいなかつたら……騎士団は今頃なかつたかもしれないぞ？ お前とて、どうなつていたかわからない」

「それは……結果論だ！」

「何を今更……大事なのは過程ではなく、結果。そう言つたのはお前だろ？」「…………！」

「確かにライのやつたことは正しいことではないかもしれない。だが、お前は友情にとらわれたことで……スザクという最大の戦力を手に入れ、ライとカレンという最高の戦力を失った。果たしてどうするのかな？」

「……お前は知つていたのか！？ ライが目を覚ましていたことを！ あいつらがブリタニアに行つたことを！」

「ああ、知つていた」

Ｃ・Ｃ・はさも当然のように答えるが、その様子がルルーシュの

怒りをせりに引き立てた。

ルルーシュは思わず彼女の胸倉をつかむ。

「なぜもつと早く言わなかつた！？ それさえわかつていれば、まだ手のひつけはあつた！」

「嘘をつくな。一体お前に何ができた？　ただ絶望に落ちるだけだろ……今更女々しいゾルルーシュ。

「殺す……だと？」

「少なくともカレンはお前の「」とを殺してくるだらうな。あいつはおそれくお前がライにギアスをかけたことを知った。そしてあいつは、ライのためならお前であろうと迷うことなく殺すだらう」

111

「ライも同じだ。あいつはカレンを一人にさせない。カレンが修羅の道を歩むのなら、あいつは迷うことなく共に進む……お前が殺されなければ、お前が殺されると黙つていい」

こ・こ・の言つてることは正しい。カレンは▽・▽・とライの話を聞き、真実を知つた。そしてその上でライを受け入れ、ライにギアスをかけたルルーシュを恨んでいる。

ライも、一度カレンに悲しい思いをさせてしまった上に彼女をブリタニアに取り込ませてしまつたことに深く負い目を感じている。カレンを守るためなら彼は仲間であらうとも戦つことに迷いを感じない。

一人はすでに、戦う覚悟を決めていた。騎士団と相反する覚悟ができるいた。

「私を失望させるなよルルーシュ。私はお前が生きていればそれでいい」

1

ルルーシュは何一つ返事をすることができなかつた。今だ何が正しかつたのか……間違つていたのかを整理できていなかつた。

部屋にはただ、こ・こ・がピザを食べる音だけが広がつていつた。

「ライ……どうしてなんだ？ どうして君がブリタニアに……？」

スザクは自分に連れられた個室で一人呟いていた。今部屋にはスザクしかいないため、その声を聞いている者はいない。

彼の力のない声は自室に広がり、誰にも届くことなく消えていく。

「どうして、僕に進む道を教えてくれた君が……どうして僕達の道に君はいないんだ……」

ライがかけたギアスは『黒の騎士団に加わり、ゼロの進む道を切り開け！！』というもの。

たとえライが、ギアスをかけたライがブリタニアに加わろうともその効果は続く。

ゆえにスザクは迷っていた。騎士団に入ったのは間違いだったのではないかと。

「やつぱり、僕が間違っていたのか……？ 僕はコフイと……ッ！」

違う！ ゼロが正しいんだ！

ゼロの道が僕の道。そして、ゼロの道を切り開くのが僕の役目。だから、ゼロの道を邪魔するなら……ライでも、カレンでも……ユフィでも！ 僕は……！

スザクの疑問もライのギアスによつて打ち消されていく。王の力は彼のささいな迷いも許さなかつた。

白き騎士は光を失つた瞳で、友を……大切な者達と戦うことを決意していた。

「スザク君、今大丈夫か？」

「！ 藤堂さん！ 大丈夫です」

「失礼する」

スザクの許可を得て、藤堂が部屋に入つてくる。

師弟だつた間柄、藤堂はスザク加入のことをとても喜んでいた。騎士団幹部の中で、スザクに何の偏見もなく接する数少ない一人である。

「調子はどうだ？」

「大丈夫です。命令があれば、いつでも出撃できます」

「フツ、それは頼もしいな……ブリタニアがおそらくあと一週間たらずで攻め込んでくる。それまでにランスロックの調整をしておけとのことだ」

「わかりました」

本来ならこうして言葉を交わすこともなかつただろう。

以前は戦場で、ナイトメアの通信越しに話すだけだつた。それが今、こうして仲間通しで話し合える。藤堂にとつて、これほど嬉しいことはなかつた。

「……君は大丈夫か？　ライ君や紅月君とは、クラスメイトだつたんだろう？」

「関係ありません。彼らがゼロの道の妨げとなるのなら、僕が彼らを討ちます。ゼロの道を切り開くのは自分です！」

「……そうか。いや、それならいい。期待しているぞ」

「はい。」

（……どうなつていい？ 賴もしくはある……だが、何かがおかしい。あれほどゼロを否定していたスザク君が、今となつてはゼロを肯定するどころかゼロを守るほどになつた。一体彼に……いや、彼らに何があつたんだ？）

スザクやライ達の変貌に疑問を感じつつ、藤堂はその疑問を心に留めた。

変わつたのも個人の理由がある。その理由を自分が聞いても仕方がない。

藤堂は何も聞かずに、自分の任務を全うするため部屋を後にした。

第五話 惑つ者達（後書き）

作「スザクが心配だ……」

ル「といつか、今のスザクって、ギアスが一重にかかっているんだよな？」

作「ライとルルーシュのギアスにかかっている……こんなやつ初めてですよ。次回は再びライ達に視点を戻します」

みなさんお久しぶりです。startです。今日は相反の舞台設定についてお話ししていくつもりと思います。

「お久しぶりですライです。僕も参加させていただきまや」

番外編から始まつたこの物語、ゆえに設定などがいろいろ付け足したりする部分がけつこいつがあるので、こじで紹介しておこいつと思います。

「まさか、連載になるとま思わなかつただらつね……」

ええ、感想でもそつこつたお言葉をいただきました。

……では早速、相反の設定について話しておきたいんですけど、まずは日本のことについて話しておきます。

「……原作とは違い、行政特区は起こりず、日本は解放された……」

そう。原作と違うのは、ライ君も書つたとおりこの時点での日本が

解放されたということ。

また、ブラックリベリオンの敗戦がなかつたので、キヨウト六家のメンバーが全員生き残つてゐるということです。

「桐原さんたちか。経済面でも大きな役割を果たしてゐたが……」

戦前の政治にも関わつてゐた人たちですからね。解放後、日本の政治に大きく貢献しています。

今も日本の代表として、神楽耶が参謀役の桐原と数名の団員を連れて中華連邦に交渉しています。

「神楽耶様か……スザクが騎士団に入ったから、まだ良かつたとも思えるけど、複雑だな。兄のように僕をしたつてくれたのに……」

宿反では実際に義理の妹ですしね（笑）

それと黒の騎士団のことなんですけど、一期では日本が解放された後に何人か幹部が辞めていますが、相反では誰一人やめていません。なにしろブリタニアが健在ですし。

そしてカレンが務めていた零番隊隊長にはスザクがつきました。

「スザク……親衛隊にスザクか。零番隊はゼロの直属の部隊だし……厄介だな」

そして……騎士団についてもう一つ。

かつてライが務めていた『戦闘隊長』という職は完全になくなりました。ゼロの決定だつたんですが、ライが騎士団を裏切つたと団員達に示すためです。

「……」

……まあ、騎士団のことはこの辺で。次は皆さん気が気になつていい……かもしれないアッシュ・シユフォード学園について。

「そういえば、学園の皆は？ 生徒会のメンバーは？」

学園理事長・ルーベンは、一時ブリタニアへの撤退も考えたのですが、結局日本にどどまりました。ルルーシュ、ナナリーの両名を保護するために。生徒会のメンバーも学園にいます。

ただ、やはりブリタニアの生徒の中で本国に帰るという人が増えたので、生徒数の調整・日本との友好関係を築くため、日本人の生徒の受け入れを積極的に行っています……それでも日本人の入学は少ないんですけど。

「なにしろ戦争してた相手だからな。そんなすぐには無理だろ？……でも、生徒会のみんなが無事だつたなら何よりだ」

日本につけてほしかんな感じです。次はブリタニアについて……

「まさに、今の僕達だな」

ええ……第三位王位継承者になり、選任騎士にカレン、新鋭隊長にジャレニアとなかなか濃いメンバーが揃つてますからね。それで、まずはライの部隊について紹介していくと思います。

「いろいろ複雑なところがあるんだけど。ロイドさんたちまでいるし

ロイド、そしてセシルはシュナイゼルの許可ももらい、特派は正式にライの専属開発チーム『キヤメロット』となりました。今はライとカレンたちの専用機の強化。それと新量産期の製造に取り組んでいます。

「……最初は酷かった。シリコーラータをこうこうやうやうねー……」

……まあ、シリコーラータのことは後ほど語りうと思います。なにしろ、今まで表舞台に出なかつた皇族が、ラクシャーラの円トに（しかもかなりピーキーな機体）乗れるわけないですかりね。ロイドも気になつたんですよ。

「まあ、円トや紅蓮が強化されるならいいけど……あとせ、シリコーラー郷やマリーカの機体か」

シリコーラーの機体は皆さんおなじみのザザーランド・ジークです。ただし輻射障壁発生装置はなく、ジークフリードのブレイズルミナス、電磁装甲を装備。

マリーカの機体はヴィンセント……まあ、つまりは原作と同じです。色も含めて。

「あと、皆さんが気になつてこるのはおそらくホーネリニアとゴーフホニアのことかな?」

「Jの一人は特に皇帝からの御咎めはありませんでした。（シャル

ルにとつて、日本を失つたことよりもライを手に入れたことの方が大きかった)

ただし、コーネリアは自分から離宮に下がつていきました。ユーフェミアも同じく。ギルフォードたちも一緒です。

「なにしろ数々の国を植民地にし、『ブリタニアの魔女』と呼ばれた人が、反ブリタニア勢力に敗れたからね。やっぱり思うところがあつたんだろう……ユーフェミアはスザクのこともあるし……」

それとコーネリアのことなんですが、一度ライと会い、十分に戦える男と判断し、日本征服戦にむけてダーレルトンをライの部隊に派遣しました。

彼はかつての日本制圧にも活躍し、軍略にも長けた将軍。ライにも忠誠を誓い、ライの部隊の訓練・他国の偵察を行つています。

「……なんか、本当に僕の部隊つて濃いメンバーが揃つてないか?」

纏めると……

総司令 ライ
選任騎士 カレン

親衛隊隊長 ジャンニア

参謀・軍事総責任者 ダールトン

特務隊隊長 マリーカ

技術開発担当 ロイド

オペレーター セシル

……色んなところから集めたな、おい。

「それ作ったの君だから」

……これまでになるとほ思わなかつた……あ、ダールトンの機体はヴィンセント。ギルフォードが乗つっていた機体です。他の者達には、ヴィンセント・ウォード（量産機）やグロースター、ザザーランドが配備われてます。

……とまあ、ほんなかんじです。これで今回の説明はお終いです。

「皆わんざりでしたか？ 感想や疑問はこいつでもお待ちしてこますのでよろしくお願いします」

では、また次回！

「……セシルさん。ロイドさんはこますか?」

「……ライ殿! ようこそお越しへださるこました。ロイドさんは

「……」

「……ライ殿! まことに久しぶりですね」

「ええ。それで、今日を僕を呼んだ理由は?」

「ライのナイトメアになにか問題でも?」

今日、僕はロイドさん「ナイトメアの」とと聞えればそうなんですが……ビバフ
ていた。当然のことながらカレンも護衛として同行している。

ロイドさん達にナイトメアの整備を頼んでまだ一日しかたっていないのだが……

「いえいえ、ナイトメアの」とと聞えればそうなんですが……ビバフ
かと言こますと殿! 血身のひとでして……」

「僕の」とへ、

「はい。正直に言いますと、殿下のあの機体は……とてもではありませんが初軍務の殿下に乗られる機体ではないと言いますか……」

「……なるほど。つまり、僕では役不足だとそう言いたいわけです
か」

「！ 違います殿下！ 今回のこの機体……『月下』は、第七世代に相当するナイトメアの上に、出力傾向が他のナイトメアに比べペー
キーで、普通のパイロットには扱いがたい代物なんです。

しかもこの機体には輻射波動という特殊な武器が装備されており、
軍人でもこれを完全に扱えそうなものはいません。ロイドさんの言
い方が悪いだけで、決して殿下を侮っているわけではありません！

「いや、別に責めているわけではないですよ。そのことは僕も承知
の上ですから」

セシルさんが必死に弁解をしてくるので一応誤解を解いておく。
彼女も僕が皇族ということで、色々気遣いをかけてしまっているな
……上司がロイドさんだし。

そんなに気を使わなくていいと言つたんだが、彼女といい、ジエ
レミア卿といい生真面目な人が多い。

「それで？ 僕を呼んだのはそれを言つためだけではないんじょ

「うへ。」

「ええ。殿下にはナイトメアのシミコ レータやつていただこうと想
いまして」

「シミコ レータ？ 実戦ではなくて？」

「もしものことがあつたら大変ですからね。
それに、殿下は一度サザーランドを乗りこなして見せたじゃない
ですか」

「……それもそつか」

一度、ロイドさんの要望でサザーランドに乗つた。もちろん、僕
がパイロットとして任せられるかのテストだったのだが、文句なし
の高得点をたたき出した。

Gにも対応しているし、実戦でも普通の機体なら大丈夫と判断さ
れたわけだ。

「すでに用下のデータを入力しています」

「シミコ レータをはいえ、並の力では動かせませんよ？」

「わかつてします。早速はじめましょつか」

僕は早速シミコレータを開始することにした。

「セシル君、よろしく」

「シミコレータを開始します。殿下、モニタに外の景色が映りましたら、前進してください」

セシルさんの言つとおり、田の前に架空の景色が映りだされた。なんの障害もない平野だ。指示通りまずは前進する。

「戦闘管制に入ります。特派”月下”は現在単騎で哨戒任務を遂行中。進行方向上に小規模編成の敵ナイトメア部隊を発見。特派”月下”は速やかに敵対勢力を排除せよ」

「了解」

ペダルを踏み込み、速度を上げた。シリコーラータと並んで、本物の月下旬のようなスピードをしつかりだしてくれる。ディスプレイ上の点がみるみる近づいてくる。

「敵部隊、まもなく交戦距離」

モニターに三騎のナイトメアが見えた……『無頼』だ。

スピードを落とすことなく正面にむけハンドガンを放つ。

敵は三方向に散らばった。

弾は当たらなかつたが、もともと当たるつもりで撃つたわけじゃない。先に撃たれる前に、敵を散らすことが目的だ。

一番近い機体に狙いを定める。速度はそのまま維持し、すれ違いざまに制動刀で斬りつける。無頼は一撃で沈んだ。

斬撃と同時に急旋回し、残った二騎のうち上方を正面にとりえる。ハンドガンで即時撃破。

最後の一騎が側方から撃つてくるが、距離があるので楽に回避できる……いや、僕と月下旬なら、たとえ距離がなくても回避できる。

最後の一騎がアサルトライフルを連射しながら突っ込んでくる。最小限の動きでこれをすべてかわし、距離がつまつたところでハ

ンドガンを撃ち返す。

「これで最後の一機も戦闘不能になった。

「敵部隊の全滅を確認」

「すごいね。接触から17秒で三騎を撃破……本当に戦場に出たことないんですか?」

「ライならこの程度、朝飯前よ」

外では三人が会話しているのが聞こえる。カレンも誇らしげに話すが……あまりそういうことを言うと、直のこと疑問をもつだらうから、あまり言わないで欲しいんだけどな。

「全弾ギリギリでかわしています。それも、操作の回数がペーダルと操縦桿そうじょうかんに對して、1秒間に最高12回もの入力をしています。それも機械のような正確さで」

「もし相手のナイトメアに人間が乗っていたら、亡靈と戦っているんじゃないかつて思うだろうね。

真正面でほとんど動いていないよう見える殿下の機体に、弾があたらずすり抜けていくんだから。

殿下は本当におもしろいですね~。これならすいへ良じトータが
とれそうですよ、んふふ~」

ロイドさんが興味津々といった感じで呟いている。最も、所詮は
ただの無頼だし、それほどたいしたことを見せつた覚えはないが、や
はり普通に考えれば「こと」なのだろう。

「敵増援部隊、後方より接近中」

「あ、まだ続くんですね?」

「ええ。いけないとここまでこつこつみてください」

「敵増援部隊の編成、サザーランド15騎

……サザーランド15騎　一気にレベルが上がったな。

まあシミュレータだし、いけるところまでこつてみよつ。今の僕
の実力を知る絶好の機会でもある。

「イヤは』にけるといひゆで』と言つたが、その『にけるといひゆで』といふのがくせものだった。

「敵ナイトメアを撃破。敵の残存戦力、『ザザーラン』⁸

「ふふふ、すいこですね殿下。もう1騎倒しちゃつたよ。」

「敵のそりなる増援部隊を確認。編成、月下4騎。2方面より急速接近中」

「ちよ、ちよと待つて！ なんなの…？」シニコーラーのプログラムは？

「こやー、じままでいけるかな？ と思いまして。倒せば倒すほどじこくなるみたいになつてこなんですよ

ロイドの性格上、今回のシニコーラーは敵を倒せば倒すほど、どんどん敵が強くなつていくという、過酷なプログラムが組み立てられていた。しかも、その内容はただ単にレベルだけが問題ではない。

「月下4騎、交戦エリアに到達。特派月下、右肩に被弾。損傷は軽微」

「あー……すゞいすゞい。見ました？ 今の動き。また1騎……いや、2機倒しましたよ」

「敵のさらなる増援部隊を発見。編成……月下指揮官機！？ 交戦エリアに接近中」

「ロイドさん……これってまさか、黒の騎士団の戦力を……！？」

「輻射波動、残弾ゼロ。飛燕爪牙、破壊。エナジーフィラー22%。殿下……！」

「いやー、すゞいかったですね。しかし殿下、汗だくですよ」「……あれをやつたら、汗だくにもなりますよ」

「あの設定はやつすきです、ロイドさん！」

やつぱつロイドさんの組んだプログラムだったか……いや、途中からそんな気はしていたけど。

あんなプログラムをロイドさん以外の人が組み込んだなんて考えたくないし。

「でも結局、エナジー・ファイラーがなくなるまで戦い続けたんだから、いいんじゃないの？」

「ライ、大丈夫だった？ あんなに酷いシミュレータで」

本当にひどかった。途中、ガヴェインやランスロットまで現れたり……まあ、ランスロットが到着する前にエナジー切れになつたわけだけど……

「でも、あれ」今まで出す必要あつたのー？」

「まあまあ、シュタット・ホールト卿。実際ガヴェインは戦闘には参加していませんし……」

「それでも、空中からずっと狙つてたじやないー！」

やつ。ガヴェインは戦闘にこのル参加しなかつた。しかし、隙あればいつでもハドロン砲を撃つと示すやつに、常に空中から月下を狙つていた……ゆえに陸上と空中、一つに對して常に気を回せなければならなかつた。

「でもこれだけ戦えるのなら、殿下が戦場にでも何の問題もないですね……」このロイド・アスブルンド。責任を持つて殿下のナイトメアを用意させていただきます」

「……ああ。じゅうじゅう、よろしく頼みます」

「これで一安心だ。おそらく、ルルーシュたちも次の戦いまでに戦力を整えてくるだろう。ナイトメアの質だって上がっているはずだ。こちらも早いうち、ロイドさんにナイトメアや新武装の開発をしてもらわなこと。

- - - 後日 - - -

僕は再びロイドさんに呼ばれた。研究所にはセシルさんの姿は見えない。どうやら今日は外出中のようだ。カレンは今日はジン・ア卿のところに部隊の様子を見に行つてもらっている。

つまり、今日は僕とロイドさんだけか……

「殿下～今よろこびでしようか？」

「？ なんですか、ロイドさん」

「新パートのテストを行いたいんですけど、よろこびでしようか？」

「新パート？ もうできたのか？ ……わかつました」

とすがに仕事が早い。なら、早速ためをせんまい。何事も早いことにことはない。

「まずは」のライフルを試してみてください。基本はアサルトライフルと同じなんですが、モード切り替えで長距離からの狙撃もできます」

なるほど、通常モードは従来のアサルトライフルと変わらないが、狙撃モードにすると銃身が伸びるのか。

「敵を2機出すので、試してみてください」

「了解」

レーダー画面にふたつの光点が現れた。

「そこからは距離が遠く、正面モニターにはナイトメアの影も形も見えない。

」から接近するか、それとも……

「ロードセッティングの距離からでも狙えますか?」

「射程内です。モードを切り替えてみてください」

狙撃モードに切り替えると、モニターにターゲットサイトが表示される。

1騎の無頼にロックをかけて、トリガーを引く。

無頼が火を吹いて倒れた。

すぐ残った無頼に狙いを定めるが、違和感を覚える。

「ああ、狙撃モードでは速射はできません。通常モードに切り替えしてください」

すぐに切り替える。

アサルトライフルと同じように使える。一回の速射で、無頼を撃破した。

「どうでした、殿下？」

「切り替えを使いこなせば、かなり助かる……ただ、エナジーフィ

「ハーの減りがやけにめこのが氣になるんですが……」

ゲージを見ると、エナジーが余分に減つていて。

「狙撃モードの時はファクトスファイアを開きっぱなしにして、なつかつ感度を増幅させますから……そのファクトスファイアも新バージンですけどね。あとライフルそのものも、狙撃モードでは通常モードの15倍のエナジーを消費します」

「だから速射ができないし、ロックに時間がかかるんですね」

「はい。使いすぎますと活動時間がどんどん短くなりますからね……殿下にはつけないほうがいいかもしませんね。総大将ですしエナジー切れなんて一番危険ですからね……それじゃあ、次のパートをシミュレータにロードしましょう」

ロイドさんは楽しそうな声で話しかけてくる。そのせいか、僕もなんとなくつきのパートが楽しみになつてきただ。

「……れはシニア・ソードなんですが……」

「……妙に柄^{つか}の部分が長いですね」

「いいところに気がつきますねー。それ、2本つなげても使えるんです。いろんな使い方ができますよ。つねげて使ったり、分離して両手に一本ずつ持つてもいいですし、もちろん一本だけ使ってもいい。アタッチメントをつけてぶら下げておきますね」

なるほど。これは先ほどとは打って変わって近接戦闘用の武装か。これも期待できそうだ。

「じゃあ、敵機を出すのを使ってみてください」

至近距離に二騎の無頼が現れた。

ショートソードを左手に持ち、無頼が振り下ろしてきたトンファを止めようとする。特に手がいたえもなく、トンファがズバッと切断された。

そのままの勢いで無頼の肩口から胸にかけて、ソードを走らせる。無頼はあっさりと切断された。

「……すごい切れ味なんですが。一撃で無頼が……制動刀と同等の、いやそれ以上か?」

「大きさは違いますけど、機構はランスロットと同じ、メーカー・バイブレーション・ソードですからね」

「MVSですか。刃の部分が高周波振動しているつていう……」

「……殿下。本当にナイトメアのことによく知ってるんですね。もつねこらへんの騎士が見たら自信喪失しかやいますよ～？」

……まあ、本当は戦つていたし。

苦笑したいところだったが、残つた一機の無頼が襲いかかってくる。

今度は一本のソードをつないで一本にして、左の無頼に突きを入れ、引き抜きつつ反対側の刃を前に押し出し、右の無頼を腰からまつぶたつに斬りおとした。

「使い勝手はどうですか？ それ」

「いいですね。とくに複数のナイトメアと至近距離でもみ合いになつたときには、かなり有効ですよ」

「なるほど。そのソードは凡庸性が高いですからね。量産も考えているんですよ……うん。いいデータがとれました……せっかくです

から、今回のラベンジこそもす？」

「ニベノジ?」

「ええ。前回はランスロットなどを相手に途中でエナジーが切れましたからね。藤堂などを相手に……やってみませんか？」

「…………いいだろう。その挑戦受ける」

そう言わると、戦士である以上引き下がるわけにはいかない。今後のためにも良い勉強になる。

目の前には早速、四聖剣が揃つていた。

「「何をやつていろんですか！？」ロイドさんほともかく、ライ（殿ト）までーー。」

「「すみませんでした」」

結局氣がついたら一時間ぶつ通しでシニコーラーを行っていた。完全に勝つまでやろうとしていたら、戻ってきたカレンとセシルさんに止められて……現在、一人で正座中です。女性は怒らせると怖いと初めて知りました。

「殿トも氣をつかへぐださー。ロイドさんほまつとくと向時間でも騎乗せようとしますので、殿下自身の判断で降りてください」？ パイロットは体調管理も大切なんだから」

「うん。」めんなさい」

……今まで皇族が自分の騎士に正座で謝るといった例があつただらつか？ 今、ここではありえない光景が広がっている。

十分ほど説教が続き、やっと僕とロイドさんは解放された。……足が痛い！！

ひとまず僕はロイドさんとセシルさんにナイトメアの「ひと」を任せ、離宮にカレンと戻つて行つた。

「ライ、お願い。本当に無茶はしないで……」

「？ カレン？」

「言つたでしょ。あなたは私が守るつて。あなたが一人で全てを背負う必要なんてないんだから。

私も戦うんだから……もう、無茶なことはしないでー。」

知らぬうちに、カレンにつらい思いをさせてしまったようだ。
確かに他のものからすれば、僕は一人で戦う戦士のように見えた
だろう。騎士団の戦力を相手に一人で相手をしていたんだから。

そんなことにも気付かないなんて、本当に馬鹿だ、僕は。

「うん、ごめんねカレン」

「一緒に戦いましょう。これからもうひとつ……」

カレンが僕の手を握り締めてきた。僕も彼女に答えるように力をこめた。

……そうだ。僕は一人じゃない。一人で戦っているんじゃない。
頼もしい騎士が、パートナーが傍にいるんだから……

作「投稿が遅れてしましました。次回はマリーカ、あるいはコーネリアとの出会いについて書きたいと思います」

ラ「……これはまた、なかなか難しい話を

作「特にマリーカなんですよね。なにしろ、紅蓮によつて兄・キュー・エルを失っているから、そこをどうするか……」

皆さん2ヶ月の間、お待たせしました。

予定ではマリーカの話を投稿するはずだったのですが、その前に1話だけはさみます。

時間は少し戻り、ライの専属開発チーム『キャメロット』の研究室。

ライとカレンが離宮へと戻ったあと、ロイドとセシルはライのナイトメアのデータの処理やシミコレータの後片付けを行っていた。

「ロイドさん、早くしてくださいよ。あとで殿下的ところにお伺いしなければならないんですから」

セシルがロイドへ呼びかける。

先ほどはその場の勢いに任せて何も考えずにどなつてしまつたセシルだったが、冷静になつた今となつては先ほどの自分の行為がどうほど無礼であつたかを気づき（カレンも一緒にどなつっていたが）、そのお詫びと、データの作成に協力してくれたお礼にライの離宮を訪れようとしていた。

最もライ本人は全く気にしていないし、むしろありがたくさえ思つてゐるのだが……生真面目な性格の彼女にはそんなことは通用しない。

「わかつてゐるよ……まったく。自分だって殿下のデータを取れて喜んでいたくせに、僕のことは散々言つてくれちゃつてや……」

「……何か言いましたか？」

「いえ。何も言つてません」

ロイドが先ほど自分もセシルにどなられたことをボソッと非難するが、地獄耳でも持つてゐるのだろうか？ セシルは恐ろしいほど笑顔で 恐ろしい笑顔でロイドに聞き返す。

さすがのロイドもこれにはたまらず反論するための言葉が出てこない。あるのは自分の行動に対する否定の言葉のみ。

「……ねえ。それよりも君に聞きたいんだけど……君はあの人

「ライ殿下のことについて思つてゐる?」

「いきなり何ですか? その質問の意図は?」

「ああいや、変な意味ではないんだ。ただ純粹に、君の意見を聞きたくてね」

ロイドが珍しくナイトメア以外のことでセシルに質問する。
ロイドは普段からナイトメアのこと以外には、たとえ人であろうともほとんど興味を示さない。上下関係や社会的タブーにも無頓着であり、非人間的であるような振舞いさえ目立つ。

その彼が、ライについて質問してきたのだ。不思議に思わないはずがない。

「……すばらしい方だと思いますよ。今まで公の場にさえ出てこなかつたというのに、円満な人格を持つて人当たりもいいですし。能力的に見ても……政治に通じ、ナイトメアの操縦や部隊の指揮にも長けていて、正直言つて今まで私が見てきた人の中では、最も優秀な方だと思っています」

セシルはここ数日でライと出会い、話した内容や見てきた内容、さらにはシミュレータの結果から客観的に述べる。確かにライは人格的にも、能力的にもブリタニアの中で見て いや、世界的に見てもトップクラスの人間である。

「……そうか。君はそう思うんだ。僕も確かにそう思うよ。だけどね。僕は正直言つてライ殿下のことを……怖いと思つているよ」

「怖い……ですか？」

思わずセシルがロイドの言葉を反芻する。

先ほども言つたが、ライは人当たりがよく、また部下に対しても優しく接し、皇族としての奢りも見せず怖いという表現とはかけ離れた存在だとセシルは感じていた。

「うふ。完璧すぎるところもそうなんだけじゃね……」この間のシリコーンで見て、そして今回のシリコーンで確認したんだ。

「ライ殿下の、戦つてこむ姿をね」

「…………ロイドさん。まさか、そのために今ロのシリコーンを行つたんですか！？」

「…………ねえ君。まさかとは思つけど、僕が本当にデータを取るために2時間も殿下を縛り付けたと想つていいの？」

セシルの意外そうな言葉に、ロイドが不満そうに尋ねる。
その顔から、ロイドが機嫌を損ねたような姿がうかがえる。

「い、いえ……ただ、意外だったの……」

「残念でした。データを取りたいのが半分、確認したいのが半分だよ」

……わざと、それもロイドの演技であつたりしたのだが。

「……ロ・イ・ド・さーん？」

「！」みんなさーこ、「冗談です。本当に確認したかつただけです。
……話を戻すよ。ほら、この前……殿下がシ//コ レーショングで藤
堂のナイトメアと戦つたの覚えてる?」

「はー。あの悪魔のようなシ//コ レーショングですよね」

ロイドがセシルの鉄拳から逃れるため、話を変えて先ほどのシ//
コ レーショングについて述べる。

今ロイドたちが言つてゐるのせ、最初ライがシ//コ レーショングに
取り組んだときのプログラムのことだ。黒の騎士団の戦力との連戦
につぐ連戦。まさに悪魔のようなプログラムだ。

……当然ながら、そのプログラムを組んだのはロイドである。

「あの時……殿下の機体はすでに無頼やサザーランド、そして四聖

剣の連携攻撃の前に追い詰められていた。そこに追い討ちをかけるかのように現れた藤堂。常識的に考えれば正に絶望的な状況だよね。味方もいないし、援軍も望めない。そんな時、殿下はどんな表情をしていたと思つ?「

「……まあ?」

「殿下はね、あの時……笑つてたよ。藤堂が現れた瞬間、笑みが現れた」

「……笑つてたんですか?」

「うん。あの表情は……あの瞳は、戦場を知る者だけが纏うものだよ。思わず僕は鳥肌がたつた」

それは正に、好敵手と出会つた強者がするものであり、戦いを楽しむものであつた。

ライは自分の危機さえも喜んで迎えつたのだ。スザクさえ、そのようなことはしない。

「つまり……ブラッドリー卿のような方だと?」

「いや、それは違つよ」

「？」

セシルが問い合わせるが、ロイドはそれを迷うことなく否定する。

ルキアーノ・ブラッドリー

帝国最強の騎士団『ナイトオブランズ』の一角、ナイトオブランを務めている男。

攻撃的な人間で、戦場での破壊と殺人を何より好む。

その凶暴性は味方にも向けられることもあり、撃墜寸前の味方艦を敵艦に向けて撃墜すると言う暴挙も平気で行つたりする為にブリタニア軍内でも嫌われている。

「だつてブラッドリー卿とライ殿下では、タイプが完全に正反対だからね」

ロイドが語る「こと」によると、「うつこつ」とあった。

ルキアーノは自らの快樂を求めるがために、自ら望んで狂い戦場へと立ち始めた。

対照的にライは護る為に戦場を知り、その過程で勝負さえも好むようになったのではないかと。

結果的にそうなつてしまつたライと、最初からそれだけのために戦場に出るルキアーノ。

この二人が同じわけがなかつた。

「だけど、だからこそ怖いんだ。ああいう強い人に限つて……壊れ

やすいんだよ。

その肉体も、心も……互いの関係も。君も知つていいでしょ」

「……ええ」

「最も、シユタットフェルト卿がいればその心配はなさそうなんだけど……僕が気になるのは、ライ殿下が、過去にすでにそういう経験があつたんじゃないかつて思うんだよね~」

「過去に、ですか？」

「うん。なんとくなんだけど、そう感じるんだ。

普段からあの人は……何かを失つことを恐れ過ぎてこるよつに思えるんだよ」

ロイドの想像は的中していた。

ライは常日頃から失うことを恐れている。記憶が戻つてからは常に。特に、ルルーシュによつてギアスをかけられた後はいつそう強くなつた。

再び大切な人を傷つけてしまうことを、失つてしまつことを……

「そしてそうなつたら、もう止められない。何をするのかわからないんだ。僕が恐れているのは正にそれだよ」

「……そつだつたんですか」

「ま、僕達がここで言つても何も起こらないんだけどね」

そう言つて再びロイドは作業に戻つていつた。
飄々とした性格でつかみどころがない人間だが、人一倍人を見て

い。

ある意味で、ロイドもライの数少ない理解者となつてているのかも
しれない。

5・2話　　主と騎士（前書き）

個人的にはマリーカは好きなキャラです。

というか、ギアスの次回作を書くとしたらマリーカがヒロインになるかもしれません。

ライがブリタニア皇帝によつて与えられた離宮。
現在その場所に主たるライ、選任騎士であるカレン、親衛隊隊長
を務めるジエレミアがいる。

そしてその場に、新たにライによつて取り立てられた若い騎士が
離宮へと訪れていた。

まだどこか幼さの残る顔立ち。

整えられた栗色の髪。

碧色の大きな瞳。

その体には昨日卒業したばかりの士官学校の制服を身に着けてい
る。

その騎士はライたちのいる部屋へと入ると、ライの眼前で膝を折
つた。

「ライ殿下。お初にお目にかかります。私はマリー・カ・ソレイシイと申します。この度は私のような者を選出していただき、恐悦至極に存じます。

この命死^{マサニ}かるまで、殿下の剣となり盾となり戦い抜くことを^{マサニ}に誓います」

「ああ。これからよろしく頼むマリー・カ。君のことはジエレミア卿からよく聞いている。

まだ15歳という若さでありながらも、類まれな実力を大いに発揮し、陸戦練機科でも最優秀の成績を記録したと」

「いえ、私などはまだまだ若輩者です。皆さんの足元にも及ばない身です」

「……謙遜する必要はない。それは間違いなく君の実力だ。自信をもつてくれていい。

むしろ、それだけの実力を持っているからこそ僕は君を選んだんだ

だ

「！……はい、ありがとうございます！」

ライの言葉に戸惑いを覚えながらも、マリー・カはしっかりと返事をする。その顔には若干の笑みが見られ、頬が緩んでいる。

マリー・カは以前までコーネリアの従卒を務めていた。ゆえに皇族

への礼儀・配慮もしつかりしている。

……だが、ライは今までマリー・カが出会つてきた皇族とは全く違つていた。皇族としての奢りもなく、かといってコーネリアのような厳しさもない。どちらかと言えばシュナイゼルのようなイメージが感じ取れるが、ライはシュナイゼルのような作つたような雰囲気ではなく、素の雰囲気を感じる。

「それともう一つ。君は先ほど『命尽きるまで戦う』と言つたが、軽々しくそのような言葉を使わないで欲しい」

「…………え？」

「それが君の固い決意だということはわかる。だが僕の部隊には、命を捨てて戦うような特攻隊員はいらない。

たとえ僕一人が戦場から生き残つたとしても、そこからは何も生まれないからね……」

「…………」

マリー・カは思わず目を丸くした。それも当然。少なくともライが言つていることは主として言つことではない。騎士が戦場において最も大切なことは、主君を守ることにある。そのために騎士は存在する。だからこそ騎士は自分の命を捨ててでも主を身を挺して守る

のだ。

ライがこのようなことを言つたのは、100年前の自らが起こしてしまつた惨劇からだらう。あの戦いで、領民を含め味方は一人残さず死んでいた。全ては自分を守るために。

だからこそ、ライはマリーカに忠告した。あの惨劇を繰り返さないためにも。彼女のような若い騎士が戦争が終わるまで生き残つてもらうためにも。

「……わかりました。不用意な言葉を口にしてしまい、申し訳ありません」

「いや、それは君の強い想いがあつてのことだらう。別に責めているわけではない。

生きていれば何度も立ち上がり、また戦えるからね。生き残つて、共に戦つてほしい」

「ありがとうございます殿下」

「これからよろしくね。マリーカ」

「はい、シュタットフェルト卿。色々学ばせてもらいます

「私も期待しているぞマリーカ。君と共に戦場に立てることを心待ちにしている」

「ジエリニア卿、お久しぶりです。私のほうこそ、どうぞよろしく
お願ひします」

ジエリニアとマリーカは、キューエルの紹介で会ったことがある。
その時にナイトメアの訓練、皇族への礼儀作法などを教わつたり
していた。

「」ことが、後にコーネリアの従卒を務めた際に役立つたといふ。

挨拶をすませたマリーカは気をつけをして、敬礼した。
そして自分の仕事に戻つていいくつこに部屋を退出する。

「……殿下。なぜマリーカにあのような言葉を？」

マコークが去ったあと、ジョンレニアがライへと尋ねる。
やはり彼も騎士としてライの言葉を疑問に思ったのだらう。

「そのまんまの意味だよ。特に彼女は若い。そんな彼女に、簡単に死を選んで欲しくはない」

「お言葉ですが、騎士として主君を守るとこ、ひとせもせや騎士の存在意義となっています。

もし騎士が生き残つたとしても、主がいなければ……主を失つた騎士はどうすればよいのでしょうか！？」

ライの言葉を受け、思わずジョンレニアが声を荒げる。

尊敬していたマリアンヌのことを思に出したのだらう。ジョンレニアはあの時主君を守れず、己の忠義を 誇りを貫くことができなかつた。それ以来彼は自らを盾として、なんとしても主を守るという覚悟をしていた。ゆえに、ライの言葉はとうてい納得できるものではなかつたのだらう。

「……それくらいわかつてこるだジョンレニア卿。
だけど、そんな心配はしなくていい……僕は、死なないから」

「……殿下」

「それとも僕を、信用できないか？」

「……滅相もございません。出過ぎた真似をしてしまい、申し訳ありません」

「いや、あなたの皇族を想つ氣持ちは良く伝わった」

ジョレミアが頭を下げるがライは特に気にした様子はない。

ブリタニアですごした数日間で、ライもジョレミアのブリタニア帝国・ブリタニア皇族に対する忠誠心が本物だということくらいは把握していた。そしてその一途な想いを重用していた。だからこそライはジョレミアに人事の仕事を一任していたのだ。

「……それで？ 彼女のこととは今後どうするの？」

「明日、僕達の前で模擬戦を行つてもうおつと黙つ。ジョレミア卿、マリー・カの相手を務めてくれ」

「Yes, Your Highness」

「それと、彼女のナイトメアも用意しないとね。ロイドさんにも相談しないと。」

「……そうだ。ついでに彼女に僕達のナイトメアも見せておくか」

マリーカに通達をだし、ライ達は明日の模擬戦に向けての準備を行い、さうにロイドと連絡し、格納庫にライやカレン、ジェレミアの専用機を配備させた。

…………だがこのとき、ライは気がついていなかった。

自分が行おうとしていることと、マリーカの復讐心を呼び覚ましつてしまつことを。

- - - マリーカ side - - -

私はライ殿下が住んでいるという離宮へと訪れていた。

先日、亡くなつたと思われていたジエレミア卿と再会し、そのときにはライ殿下の部隊へ加わらないかと勧誘されたのだ。

ライ殿下は本当に最近表舞台に姿を現したばかりで、詳しいことは何一つわかつていらない。

だけど私は、ジエレミア卿の言葉を忠誠を信じてジエレミア卿の提案に承諾した。

最も、私がライ殿下の部隊に加わりたい理由は他にあるけれど……

「お待ちしていました。マリーカ・ソレイシ様ですね？」

「はい」

「ライ殿下がお待ちです。エリザベス殿へ

仕えているメイドの案内で私は離宮へと入っていく。

……じじいで私は疑問に思つたことがあつた。
まず一つ。離宮でありますながらも、それほど装飾がないということ。
広さもそれほどでもない……むしろソレイシィ家本宅と同じくらい
ではないだろうか？

そしてもう一つは……使用人の数が少ないこと。

話を聞いたところ、殿下の要望で最低限の予算でこの離宮は作ら
れたという。

しかも、使用人もそんなに必要ないということとで、今はメイドが
2人、執事が1人だけだと言つ……いや、いくらなんでも皇族の方
には少ない、少なすぎるよつて思つ。警護は大丈夫なのだろうか？

「着きました。じじいで、ライ殿下をお待ちです

そうして考へてゐる間に気がついたらライ殿下がいらっしゃる扉
の前までやつてきた。

……自然と脈が速くなるのを感じる。やはり意識するなとこの
が無理なのだろう。

以前「一ネリア殿下の従卒とした経験があつても、どうしても緊張してしまう。

私は一度深呼吸し、そして扉を開いた。

……扉の先には3人の人がいた。

一人は殿下の傍にいるジョレミア卿。

殿下の親衛隊隊長に任命された人で兄の朋友でもあり、私も良く知っている。

ジョレミア卿は私を見ると若干の笑みを浮かべるが、私にはそれ

に返す余裕なんてない……ごめんなさいジョレミア卿。

そしてジョレミア卿とは反対側にいる方 カレン・シュタット
フェルト卿。

この方のことも良く知られていない。ライ殿下が現れたときに、
初めて名前を聞いた。

だけど選任騎士に任命されるくらいだし、ナイトメアの操縦技術
にも長けていると聞いたのでやはりそれなりの実力者なのだろう。

シュタットフェルト卿は私をじっくり観察するかのよう見てい

「……私の実力を探りつとしているのだらうか？」

……そして、ライ・エル・ブリタニア殿下。

整えられた銀色の髪。

深遠な青い瞳。

誰もが由を惹く、端麗な容姿。

おそらく身分のことを知らなかつたら告白していただらう……といふか間違いなく告白していたくらいの容貌。

殿下は笑顔で私のことを迎えてくれた……どうしよう。あの瞳を見ただけでも余計に緊張してしまう。その笑みは反則ですよ。

私は殿下に「挨拶を申し上げるためにも膝を折つた。顔も隠れてちょうどいい。

「ライ殿下。お初にお由にかかります。私はマリーカ・ソレイシイと申します。この度は私のような者を選出していただき、恐悦至極に存じます。

この命尽きるまで、殿下の剣となり盾となり戦い抜くことをこの誓います」

緊張しながらもなんとかうまく言葉をつなぐことができた。

「……コーネリア殿下のときは何度も噛んでしまい大変だった。ジ
ュニア卿に練習してもらつた甲斐があるといつもの。

「ああ。これからよろしく頼むマリーカ。君のことばジョンニア卿
からよく聞いている。

まだ15歳という若さでありながらも、類まれな実力を大いに発
揮し、陸戦繩機科でも最優秀の成績を記録したと」

「いえ、私などはまだまだ若輩者です。皆さんの足元にも及ばない
身です」

「……謙遜する必要はない。それは間違いなく君の実力だ。自信を
もつてくれていい。

むしろ、それだけの実力を持っているからこそ僕は君を選んだん
だ」

「……はい、ありがとうございます……」

殿下のお言葉が嬉しくて、思わず表情に出てしまつた。

やっぱり、この方は今まで出会つてきた人とは違つ。モーター越しではなく、こうして直に会つてみて直接雰囲気を味わうことで実感できる。

全てを包み込み、人を惹き付ける魅力 まるで王のよくな風格。

「それともう一つ。君は先ほど『命取るまで戦う』と言つたが、軽々しくそのような言葉を使わないで欲しい」

「…………え？」

……殿下の言葉に思わず声を返してしまつた。

実際、今の言葉はそれだけの内容だった。

「それが君の固い決意だということはわかる。だが僕の部隊には、命を捨てて戦うよくな特攻隊員はいらない。

たとえ僕一人が戦場から生き残つたとしても、そこからは何も生まれないからね……」

「…………」

本当に、今まで出会った方とは違ひ。皇族なりませりは『私のために戦い、私のために死ね』とでも言ひ方とてこるのに。そして実感できる……』の方は、おれりべ本当に戦場を知つている。体験してこる。

不思議と、殿下の言葉は私の心に重く響いた。

「…………わかりました。不用意な言葉を口にしてしまって、申し訳ありません」

「いや、それは君の強い想いがあつてのことだひつ。別に責めていいわけではない。生きていれば何度でも立ち上がり、また戦えるからね。生き残つて、共に戦つてほしい」

「ありがとうございます殿下」

そんな私に優しい言葉をかけてしまつた。

まるで本当の仲間にかけるまつた暖かい言葉を……

「これからよろしくね。マリーカ」

「はー、ショタットフェルト卿。色々学ばせてもらっています」

ショタットフェルト卿は私に手を差し出して握手をする。握られた手からはしつかり力がこもってきた。

「私も期待しているマコーカ。君と共に戦場に立てるこことを心待ちにしている」

「ジエミア卿、お久しぶりです。私のまつこ、どうぞよろしくお願いします」

ジェレミア卿も私の加入を喜んでくれた。

この方達のご期待に答えられるように、精一杯努力しないと…！

この後も一通りの挨拶をすませ、私は最後に敬礼して部屋を退出した。

緊張したけれど、コーネリア殿下の時は違つて、今はとても充実している。

早く殿下のこの期待に答えたいと、そう望んでいる私がいる。

「……マリーカ。少しいいか？」

「！ ひやつ、ひやい！ ジュレミア卿、なんでしょうか！？」

殿下との対面を済ませ、使用人の方とも挨拶を済ませて帰ろうとしたところ、ジュレミア卿に引き止められた。

……なんだらう。まさか私、殿下に対して無礼な真似をしてしまつたの！？

「そんなに身構えなくていい。私は殿下より伝言を言付かっただけだ」

「……ライ殿下からですか？」

よかつた。どうやら私の思い過ごしだったみたい。でも殿下から私に何の用だらう？

「殿下が君の実力を直に見たいと仰られてな。明日、殿下の前で模

擬戦を行う

「模擬戦！？ 明日ですか！？」

自分の耳を疑いたい。

一体何の冗談ですかと聞いただしたい。

まさかいきなり明日、殿下の目の前でだなんて……

「あまり考えすぎんな。何もこのことだけで君の評価を決めようと
しているのではない。

私が考えるに、ただ純粋に君の戦う姿を見たいというのが殿下の
ご意向だろう」

「……それでもですよ……」

「そう言つな。ついでに、模擬戦の相手は私だ」

「そうですか。それならまだ安心…………出来ないですよ……！ な
んでいきなりジェレミア卿が相手なんですか！？」

ジェレミア卿の実力は、訓練をしてもらつた私も良く知つてゐる。

少なくとも、そちらの騎士などの数倍は優れている。
それなのに、いきなりジョンニア卿と戦うなんて……

「はっはっは。私は君の成長振りを見られるので楽しみだぞ。
まあ、こつもの訓練だと思ってくれればいい」

「はあ……」

『胸を借りるつもりで来い』とこつことなんだろ? けど、やっぱり気が進まない。

確かに、シユタットフルト卿のよう²に全然知らない人が相手よりはマシなのかもしれないけれど……

「それとな、模擬戦の前に君のナイトメアに対する意見も聞きたいらしい。」

「殿下たちのナイトメアも見るチャンスだぞ?」

「……え……殿下もナイトメアを?」

「ああ。殿下の実力は私が保証する。ひょっとしたら殿下直々に相手をしてくださるかもしれんぞ?」

「それほどの強さをお持ちなんですか……」

ジエレミア卿が認めるといつだから、本当にそれだけの実力をもつていのうだろ。

ライ殿下は一体何者なのだろう?

今まで名前を聞いたこともなかつた。だけど実力も、風格も……

あの方の傍にいることで、それもわかつてくるのかな……？

ジョレニア卿とも別れ、自室に戻った私はたまらずベッドへと倒れこむ……今日は本当に疲れた。

だけど、明日のことを考えると落ち着かない。

ジョレニア卿との模擬戦。うまく戦えればいいんだけど、殿下の目の前でちゃんとできるだろうか？

「…………今それを考へても仕方がない、かな？」

私は起き上がつて、机の上に飾つてある2枚の写真のうち一枚を見る。

私の兄 キューエル・ソレイシイの写真。

キューエルはナリタの戦いで黒の騎士団の攻撃を受けて戦死した。不名誉な評価のまま、エリアーで……

軍人という仕事上、いつ死んでもおかしくはない。文句は言えない。
でも……それでも私はキューエルの死を忘れることはできなかつた。

あれだけ優しかった兄を、ジョレニア卿と時には対立しながらも

お互いに認め合っていたキュー・エル
を……

私がライ殿下の誘いを受けたのは、兄の名誉挽回のためでもある。殿下は皇帝陛下より、エリアーの掃討を命じられた。私もエリアーの戦闘に参加するために殿下についていくことを決意した。

「キュー・エル。私に力を貸して。名誉は私が取り戻す。仇も、私が討つから……！」

私はキュー・エルの写真を抱きしめ、ひたすら願つた。

そして、もう一枚の写真をにらみつけた。

キュー・エルを討つたという黒の騎士団のナイトメア
式式を。

紅蓮

- - - マリー カ

s i d e

e n d

- - -

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9721v/>

コードギアス 相反のライ～双璧の軌跡～

2011年11月26日19時11分発行